2020 受講オリエンテーション 資料

――目次――

英語科より	1.ご用意いただくものと配付するもの	p1 ～ p2
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p2 ～ p3
数学科より	1.ご用意いただくものと配付するもの	p5
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p5 ～ p7
国語科より 【大学受験の現代文入門】 （中3）	1.ご用意いただくものと配付するもの	p9
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p9 ～ p10
【Fターム古文特別講座】 （新高3）	1.ご用意いただくものと配付するもの	p11
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p11～ p12
【Fターム特別講座漢文】 （高2）	1.ご受講に当たって	p13
	2.受講効果を上げるために	p13～ p14
（参考）	受験科目「国語」の性質と長期的展望の必要性	p15
物理科より	1.ご用意いただくものと配付するもの	p16
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p16～ p17
化学科・生物科より	1.ご用意いただくものと配付するもの	p18
	2.授業の進み方と日々の取り組み	p18～ p20

英語科より

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□**授業用ノート**：**罫線の引いてある市販の大学ノート**

添削を先生に頼む場合がありますので、ルーズリーフが便利です(先生の筋力にも限界が…)。
4本線が引いてある『ローマ字練習帳』を用いるのは中1までを目安と考えてください。

□**ファイル**や**ホルダ**：**プリントを収納するための市販のもの**

毎回、複数の演習プリントが配付されます。以下のいずれかの方法で整理してください。

・「**ポケットファイル**」に入れる：20 ポケットのものを用意し、一回分を1ポケットに収納すれば 1 年間で 3 冊で済みますが、復習するときにポケットから出さなければいけないのが難点です。

・授業用**ノートに**プリントを**糊やテープで貼り付ける**：余白にメモを取るようにすれば、これだけを使って復習することが可能ですが、貼り付ける手間がかかります。

・「**穴あけパンチ**」でプリントに穴をあけ「**ファイル**」で綴じる：「穴あけパンチ」が2穴であれば「2穴リングファイル」に綴じ、「**ルーズリーフパンチ**」であれば「ルーズリーフバインダー」に綴じます。前者は安価ですが穴が破れやすく、後者は高価ですが穴は破れにくいという長短があります。授業の解説をメモした「ルーズリーフノート」も綴じれば、これだけで復習が可能です。

□**筆記具**：**鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの**

□**辞書**：**英和辞典**(電子辞書可) **和英辞典**(電子辞書可) **英英辞典**(電子辞書可 高2頃から)

授業中に辞書を引いている時間はありませんので、自習をする場合に必要です。

▼お勧めの英和辞典

①<u>身の丈に合った辞書を</u>

中学に入って英語を学び始めた新中 1 の方が、高校生用の中辞典を使っているのを目にすることがありますが、あまりお勧めできません。入門時にはそれ用の辞書を使った方が、辞書に馴染みやすいですし、辞書を使う効用も早く実感できることでしょう。一通りの文法項目が学習し終わった（**Gnoble** 生なら中 2 の夏以降）頃、なじんだ入門用の辞書が物足りなく感じてきたら、中辞典への変更を考えましょう。
入門用としては、「ジュニア・アンカー英和辞典（学研）」「初級クラウン英和辞典（三省堂）」等がお勧めです。

②<u>新しい辞書を</u>

辞典市場では各出版社が競争していますので、今も生き残っている辞書は良い辞書と言えますが、2019 年 4 月時点でお薦めの中辞典は、「ジーニアス英和辞典 第 5 版（大修館）」「ウィズダム英和辞典 第4版（三省堂）」「オーレックス英和辞典 第 2 版（旺文社）」「コンパスローズ英和辞典 初版（研究社）」です。電子辞書や辞書アプリを購入する際にはこれらを収録しているものを選ぶと良いでしょう。

③<u>家では紙の辞書を</u>

電子辞書は携帯するには便利なのですが、「画面が小さい」「用例を読むのにボタンを押さなければならない」等、不便な面もあります。「訳語だけを探して、良さそうな訳語を適当に当てはめる」という辞書の悪い引き方が身に付いてしまうことにもなりかねません。自宅の机では<u>**紙の辞書を**</u>引いて、じっくり<u>**読む**</u>ことをお勧めします。

②**Gnoble** の英語教材

□**通常授業テキスト**：小ターム[G1 ターム等]一回目の授業内で配付[高3生は毎回配付]

□**季節講習テキスト**：季節講習の一回目の授業内で配付[中3冬期、高3は配付なし]

□**演習プリント**：授業最初に配付して**演習～添削～解説**

□**音声教材**[**G**noble **S**ound **L**aboratory(以下 GSL)]：**授業で「理解」⇒ GSL で「身に付ける」**

学年ごとに設定されているパスワードを使って、ウェブサイトから GSL をダウンロードし、Workout（音声トレーニング）します。そのためにコンピューターとインターネット環境が必要です。また、Workout するためのプレーヤーも必要です。以前は「電子辞書」「プレイヤー」「携帯電話」の 3 台を持ち歩いていたものですが、今はスマートフォンかタブレット端末 1 台あれば事足ります。

『**Grammar Book**』について
本書は、新**高校３年生**の英語を**Gnoble**で受講している皆さんに、全クラスで、**春期講習終了までの自習課題**としているものです。**「中3冬期 EGGS＋高1全て＋高2全て」の文法解説が1冊に編集**されています。例文は全て**GSL**化され、英語の基礎力はこれで万全です！
新高3の英語受講者のご自宅に郵送しておりますので、ご確認ください。書籍代 1,320 円（税込）は授業料と共にお支払いいただきます。（お手元に届いていない場合には、事務局までお問い合わせください。）

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

▼中学生の授業の流れ

①プリント演習 ⇒ ②添削 ⇒ ③プリントの解説 ⇒ ④宿題の解説 ⇒ ⑤新単元の導入 ⇒ ⑥お帰り問題

①プリント演習：英作文・和訳・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。
②添削：英作文や和訳などの記述式のプリントを回収し、教室で講師が添削をします。
③プリントの解説：添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、適切な解説をします。
④宿題の解説：テキストの文法問題と読解問題(クラスにより異なる場合があります)を解説します。
⑤新単元の導入：カリキュラムにある文法単元を、黒板を使った双方向の授業で説明します。
⑥お帰り問題：Workout（音声トレーニング）してきたSentences（基本）for（例）Workout（文）の定着度を確認するため、Dictation（書き取り）してもらいます。ちゃんと書き取れた方から授業終了です。

▼高校生の授業の流れ

①プリント演習 ⇒ ②添削 ⇒ ③プリントの解説 ⇒ ④宿題の解説 ⇒ ⑤お帰り問題

①プリント演習：英作文・和訳・要約・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。
②添削：英作文・和訳・要約等、記述式のプリントを回収し、その場で講師が添削します。
③プリントの解説：添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、適切な解説をします。
④宿題の解説：テキストの文法問題と読解問題(高1と高2は全クラス共通問題)を解説します。
⑤お帰り問題：高1は全クラスで、Workout（音声トレーニング）してきた読解問題の定着度を確認するため、GSL を放送してDictation（書き取り）してもらいます。高2以降はクラス事情に応じて出題しています。

②日々の取り組み

▼宿題と復習

英語科では、中 1 から高 3 の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなくてはなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかはWorkout（音声トレーニング）を継続しておこなうことにかかっています。

▽中学生の **Workout**：小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

―― 授業で「理解」したことを「身に付ける」ための **Workout** ――

① **Listening**（聴き込み）：授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く（回数は全ての文が完全に聴き取れるまで）。電車の中での時間も利用する。

② **Retention**（口まね） / **Shadowing**：**Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。

③ **Reading aloud**（音読）：②の Workout で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき 5 回。

④ **Recitation**（暗誦）：③の Workout の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき 10 回。

⑤ **Dictation**（書き取り）：④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがないかを確認する。

以上の Workout が終わった後で、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているので、スラスラと解けるはずです。

▽高校生の **Workout**：読解問題に関して、以下の **Workout** を行ってください。

① **Listening**（聴き込み）：授業で理解した GSL 対応の長文を題材にする。

1 英文を見ながら音声を聞き、意味の切れ目を意識して目で英文を追いかける(慣れるまで)。

2 英文は見ずに音声を聞く。聞き取れない箇所は、後で英文を見て確認する。全て聞き取れるまで繰り返す。(英語の耳が出来てきたら聞き取れているかの確認に**Dictation**（書き取り）をするのもよい。)

3 英文は見ずに音声を聞いたそばから**Shadowing**（まねして声を出す）する。

（1と2は電車の中などの時間も利用する。3は自宅では大きな声で、電車ではクチパクで。）

② **Reading aloud**（音読）：授業で理解した長文を題材にする。**気持ちを込めて、声に出して**読む。目安は 10 回。一回毎に右のように印をつけてゆくと励みになります。

音読の効用は、具体的には**以下の三点**です。

1 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない（＝右から左へのいわゆる「返り読み」ができない）ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。＝ **1 回読んだだけで分かる力がつく！**

2 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。＝ **速く読める力がつく！**

3 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているので、文法・語法・語彙が記憶に残りやすくなる。
＝ **英語力そのものが向上する！**

③受講効果を上げるために

▼休まない・遅れない

受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずに【宿題⇒授業⇒復習】のサイクルを生活に組み入れている方です。授業を**休むと**、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒（かゆ）いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題…復習】の**学習サイクル全てを失う**ことになります。中学生であれば、新単元の導入授業も受けられなくなります。行事等で普段お通いの曜日で受講できない場合は、振替授業に出席することを強くお勧めします。

数学科より

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□**授業用ノート**： 授業で学習する新規事項や演習で使うノートです。B5 または A4 サイズであれば市販のノートまたはルーズリーフどちらでも構いません。中 1、中 2 のうちは図を正確に描く練習のために方眼が良いかもしれません。まれに小さいサイズのノートを利用している方を見かけますが、複雑な図を描いたり、多くの情報を書き込んだりすることに向いていません。

□**宿題用ノート**： 宿題を自宅で解くためのノートになります。中 1、中 2 は宿題の提出が必須となります。**B5 または A4 サイズのルーズリーフ**をご用意ください（ノートはかさばりますので、ルーズリーフでの提出をお願いします)。中 3 以降は提出が任意となりますが、証明問題や考え方が複雑な問題が増えてきます。担当に添削をお願いする場合は、ルーズリーフで提出してください。

□**ファイルやフォルダ**： プリントやテキストを収納するためのものです。長く通うと教材が相当な分量になります。後で見直すためにも整理整頓を心がけてください。

□**筆記具**： 鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの。ただし、**必ず赤ペンは用意してください**（できれば、赤以外にもう一色あると便利です)。定規はあると便利ですが、フリーハンドで円を描く練習をしていただきたいのでコンパスは必要ありません。

②**Gnoble** の授業内で配付されるもの

□**通常授業テキスト**： 分野ごとに 1 冊ずつ分冊された形で配付[中学生は毎授業配付。高 3E タームは配付なし]。

□**季節講習テキスト**： 季節講習の一回目の授業内で配付[高 3 夏期講習は例外あり]。

□**演習プリント**： 中 1、中 2 は演習プリントとして毎授業配付。他学年はクラスレベル、定着度等をふまえ必要に応じ、適宜配付。

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

▼中学生～高校 1 年生、高校 2 年生理系（S 系）[新規事項導入授業]

Gnobleでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、基本的に新規事項の導入時は以下のような流れで授業を行っています。

宿題の解説及び前回までの授業内容の復習 → **新規事項の導入** → **演習** → **確認**

・新単元の導入→演習→確認

新規事項の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正し

く生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。

また、担当講師が、演習中に教室を回り答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

・宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、毎回の授業で宿題を出しています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業時に解説を行います。

授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。

▼高校 2 年生文系（L 系）、高校 3 年生（前期）[演習授業]

新規事項の導入後は、大学入試に向けた戦略を分野別に伝えます。これまでに導入されてきた事項を俯瞰的に捉え、体系化することにより、問題の要求に応じた解法を自力で選択できるようになります。以下の3点が授業の柱となります。

戦略の伝達・授業内での演習とその解説・授業外での演習（宿題）の解説

・授業外での演習（宿題）の解説

演習授業で宿題にした問題に対しては、『各自の解法について、日本語と数式や図で説明したもの』を『**Gnoble** セルフチェックシート』に記入し、提出してもらうことにしています。

このシートは、取り組んだ問題に対して「解けた」「解けない」ではなく、「どう解いたか」「なぜ解けなかったか」を適切な言葉で、ポイントを絞り、客観的に説明するためのものです。これにより、生徒自身が、戦略を自分のものにすることや理解できていることと理解できていないこととを整理することにつながります。また、担当講師にとっては、生徒一人ひとりの現段階での数学力を具体的に把握できるため、参加している生徒に配慮した解説やアドバイスをすることが可能になります。この用紙を提出した上で授業に参加することで、授業が最も効果的なものになります。自宅で丁寧に書くことが好ましいです。

▼高校 3 年生（後期）[テスト形式の演習授業]

実際の入試のような分野や単元にとらわれないテストセットを、制限時間を設けて解きます。例年、大問3・4題に対して、80分～100分程度で実施しています。解いた問題については、その場で解説し、答案は回収・採点・添削し返却します。得点力や答案の作成力を高めることも目的ですが、より実戦的な問題で、各自が完成している戦略を確認・修正・補足することも目的です。

②日々の取り組み

・宿題への取り組み

中2までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。担当講師にとっては、宿題をチェックすることで、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきます。足りないと思われる部分については、再度授業で時間をとりますので、生徒の皆さんは、不足している箇所の復習や確認をすることができるのです。また、生徒自身も宿題を取り組むことによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。

また、分からない問題にも時間をかけて取り組むことが大切です。分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。

テストにおいて点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題への取り組み方で大きな差がでるのです。

・毎日数学にふれる

部活や学校行事等で忙しい日々を送っていることと思いますが、毎日「数学にふれる」ことを心がけましょう。学校の宿題でも構いません。大切なのは数の感覚、図形の感覚を損なわないことです。過去にとても優秀な生徒が、短期留学で約 1 ヶ月間数学から遠ざかっており、帰国後、授業に合流したところ今までしたことがないような計算ミスや間違いを多発したことがあります（その後、今まで通りしっかり勉強していただきましたので、約 1 ヶ月でもとの状態に戻りました）。

Gnoble の宿題や授業内容の復習も一気に行うのではなく、数日に分けて行うのが効果的です。

③受講効果を上げるために

・「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

・きちんと「出席する」ということ

学年が進むにつれて、一度の授業で扱う情報量も飛躍的に増えていきます。一度の欠席が及ぼす影響も、それだけ大きくなります。

まずは、安易に授業を休まないようにしましょう。学校行事や体調不良などでやむを得ず欠席してしまう場合は、なるべく早い段階で担当講師に相談してください。

国語科より

【大学受験の現代文入門（中３）】

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□解答用紙を整理するためのクリアファイル・クリアブック・バインダー・ノートなど
□筆記具
□辞書もしくは電子辞書：授業内でも語の意味調べで使用します。

②**Gnoble** の授業内で配付されるもの

□通常授業テキスト：F1-1 で配付
□各種補助プリント：本文内容に関わる補充教材・模範解答など

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方（全6回のカリキュラム）

第一回：大学入試の国語の記述、1回で基本をマスター！
第二回：書いてある情報を正確に読み取り、記述する①評論・随筆
　　国語記述の基礎演習①
第三回：書いてある情報を正確に読み取り、記述する②硬質な評論
　　国語記述の基礎演習②
第四回：要約を書いてみよう
　　国語記述の基礎演習③
第五回：大学受験ならではの小説問題の読み方を会得しよう
　　国語記述の基礎演習④
第六回：東大入試に挑戦してみよう
　　国語記述の基礎演習⑤

この6回の授業で、大学入学試験の現代文の読み方、解答の書き方の基礎を固めるとともに、初見の長文問題の理解の助けとなる、さまざまな物事に対する知識を身につけていきます。また、一人ひとりの解答を担当講師が個別に採点することで、自分の国語力に足りない箇所を発見することができます。

基礎から入試問題演習までを6回で学ぶ集中講座になりますので、「欠席せずに授業を受けること」「毎回の授業の復習を丁寧に行うこと」「宿題を必ず行って授業に参加すること」が重要です。

②授業の受け方

□必ず宿題をやって授業に参加しましょう。

一度自分で解答を書いてみることで、模範解答と比較した際、訂正すべき箇所が明確になります。

□模範解答を写すことで満足せず、自分で解答を書き直しましょう。

模範解答をただ写しても、それは文字を書いているに過ぎません。自分の解答と比較し、足りない箇所を補い、不要な部分を削り、「自分の国語力」を磨きましょう。

③日々の取り組み

□復習

2回復習することを提案します。

1：授業を受けた当日、または翌日の復習

授業を受けた当日の寝る前、または次の日の、まだ記憶の新しいうちに「通常授業テキスト」の文章をもう一度読み返しましょう。そこで「あれ？　この言葉の意味がわからない」と思う箇所があれば、辞書で意味を調べましょう。

また、文章を読み返しながら、頭の中で再度問題を解きなおし、模範解答と見比べて疑問点や間違った点を整理しましょう。

2：丁寧な復習

まとまった時間が取れるときに、テキストを見返して、再度解答を書き直してみましょう。その際、なぜこの解答になるのかが漏れなく説明できるかどうか、頭の中で「脳内解説」「エア授業」を行えたらパーフェクトです。

□日常的な学習

現代文の学力を上げるためには、やはり日々の読書が大切です。まずは自分が興味を持てる分野の本でかまいません。1週間に1冊ぐらいは読書をするのがおすすめです。小説でも評論文でもエッセイでもかまいません。科学雑誌のニュートンやブルーバックス、ナオショナルジオグラフィックなどもいいのです。

文字で書かれたものを読む習慣を身に着けて、読書の楽しさを知ってください。

【Ｆターム古文特別講座（新高３）】

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□**プリント（お帰り問題）を整理・保管するためのもの**
：ノート（A4サイズが便利）・バインダー・クリアブックなど

□**筆記具**：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの
授業の板書をそのままの色で写すためには、蛍光ペン（黄色）、ピンク・オレンジ・青・緑のペンが必要ですが、全てを合わせる必要はありません。

□**辞書**：古語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)
授業中には使用しません。宿題実施の補助としてのみ必要です。

②**Gnoble** の授業内で配付されるもの

□**通常授業テキスト**：F1-1 の授業内で配付

□**小テスト**：F1-2～F2-3 の授業冒頭で配付・実施

□**お帰り全訳演習プリント**：授業最後の演習、翌週までの添削、翌週授業での解説で使用

□**授業定着プリント**：授業で扱った長文の現代語訳や文法事項の確認（復習に利用）

□**古典参考書アドバイス**：F2-3 の授業で配付

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

▼全 6 回のカリキュラム

第 1 回　助動詞の基礎確認、読解演習①
第 2 回　敬語の基礎確認、読解演習②　＋　小テスト（復習＋古文単語）
第 3 回　読解演習③　＋　小テスト（復習＋古文単語）
第 4 回　読解演習④・⑤　＋　小テスト（復習＋古文単語）
第 5 回　読解演習⑥、和歌の修辞法、入試問題①（東大）　＋　小テスト（復習＋古文単語）
第 6 回　入試問題②（センター）　＋　総まとめテスト　＋　今後の学習アドバイス

この 6 回の授業で古文の単語・文法の基礎を固めるとともに、初見の長文を理解する助けとなる古文常識を身に付けていきます。基礎から入試問題演習までを 6 回で学ぶ集中講座であるため、重要なことは「休まずに授業を受けること」と「毎回の授業を丁寧に復習すること」です。

▼F ターム古文特別講座を受ける上での注意点

- 授業では書き込み型の教材を配付していますが、テキストであれば同内容を 2 回印刷し、プリントであれば 2 枚配付しています。必ず演習時には 1 度自力で解いてください（＝解説されるのを待たない）。授業を聞きながら、それを自身で添削していきます。解説や関連知識も周辺にどんどん書き込み、自分専用の濃密な参考書を作り上げましょう。

- 古文単語学習の入口として、まず 100 語の完全定着を目指します。第 2～5 回で各回 25 単語ずつ、最終回で 100 語全体を範囲とした小テストを実施します。語源を調べたり、例文を書き写したりして、理解・納得を伴う形で記憶するようにしてください。
- 第 2 回以降では、前週までの内容（文法・単語）を復習するテストを実施します。「9 割以上取るのが当たり前」という定着度を目指してください。

②日々の取り組み

▼古文の復習

最低限3回確認することを提案します。

①簡単な復習

授業を受けた日の寝る前、次の日など、記憶の新しいうちに、復習用（書き込みなし）のテキスト・プリントを眺めます。「あれっ、この部分は何だったっけ？」と感じた部分に付箋を貼りながら読み返し、書き込み入りのテキスト・プリントの方を見て疑問点を解決します。長文は、1 回音読しておくと、単語や文節の区切り目などが意識化されて、より良いでしょう。

②丁寧な復習

まとまった時間が取れるときに、文法の原理や訳の根拠などを丁寧に確認しながら見返します。特に長文に関しては、授業時に配付する授業定着プリントも実施しましょう。ゴールは「誰かに授業ができる状態」です。白紙のプリントを見ながら、前から漏れなく説明ができるかどうか、「エア授業」「脳内解説」をしてみましょう。

③見直し

次回授業の直前に教材を見返し、曖昧な点がないようにして小テストに備えます。

▼学校の授業教材の深い理解

Gnoble の授業で学んだ文法のポイント、古文単語などを踏まえ、学校で扱う長文も「エア授業」「脳内解説」ができるようにしましょう。

▼古文常識の習得

学校で配付される便覧（配付のない人は、『原色シグマ新国語便覧』（文英堂）を買い求めておきましょう）の古文時代の暮らしや文学史などのページを適宜参照し、イメージを持てるようにすることで、初見の長文に強くなります。

【F ターム特別講座漢文（高２）】

１．ご受講に当たって

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□**筆記具**：**鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの**

□**辞書**：**国語辞典**(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中に使用することもあります。復習・予習の補助としても使用します。漢和辞典も使用できればなお良いでしょう。

□**夏期講習・冬期講習の「漢文」テキスト**：巻頭の単語・句形などの情報を適宜確認します。

②**Gnoble** の授業内で配付されるもの

□**通常授業テキスト**：Ｆターム一回目の授業内で配付

□**書き下し文・現代語訳・模範解答**：Ｆターム最後の授業で配布

２．受講効果を上げるために

①授業内で

▼F ターム特別講座漢文の授業の流れ

前回実施した漢文１題を素読⇒ 宿題の解説⇒ 授業内演習の実施⇒ 授業内演習の解説

▼F ターム特別講座漢文の授業で意識して欲しいこと

人は言語を習得する際、「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」の順を辿ります。解答を「書く」ためには、それ以前に膨大な量の「聞く」→「話す」→「読む」が必要なのですが、現代の日本で生活するなかで漢文を「聞く」ことも「話す」こともありません。そこで「聞く」→「話す」→「読む」の体験を身体に蓄積させるために、徹底的な「音読（いわゆる漢文素読）」を行います。英語で音読が重視されるのと同じように、漢文においても音読は非常に重要です。

また、漢文を読む際には

1：文型の理解

2：句形（約 20 種類ほど）の理解

3：漢文の基礎知識

に留意する必要があります。授業内で担当者がもちろん解説を加えますが、自分で漢文を読む際に上記の点を自分の力で発見できるようにすることが大切です。解説では黒板に本文を書き出し、ポイント部分を全て色分けして、重要点を疎かにしない解釈を提案します。どうすれば正しい解釈になったかを各自が自分で考えられるようになってもらいたいので、一方的な解説ではなく、「発問→解説」を心掛けています。授業を最大限に活かすには、自分が指名されているときも、そうでないときも、当事者意識を持ち、主体的に参加することが期待されます。

②授業外で

▼宿題と復習

▽漢文の宿題

15分～30分程度で終えられる程度の問題を宿題として課します。ただ問題を解くだけではなく、

自分なりに一通り音読ができるようしてきてください。その際、漢字の読みが分からない場合には辞書で読み方を調べてもらってかまいません。また、文章内容を把握したうえで授業に参加することが求められます。ネットなどで現代語訳を探すことはお勧めできません。どこかで訳を調べれば、問題も解けますし内容も分かるでしょうが、それでは「漢文を読んだ」ことにはならないのです。分からないなりに自分で考えることが非常に大切です。

▽漢文の復習

漢文の復習は、理解度や復習にかけられる時間に応じて、以下の3段階の方法を提案します。

①簡単な復習（10分ほど）

授業を集中して聞いて帰宅した後、その日に習った漢文を必ず1度以上音読してください。また、授業から1日以上経った後にも音読してください。授業を受けた日の寝る前や、翌週の授業開始前の時間などに、「復習用の書き込みのない漢文のページ」を眺めて重要箇所を確認するだけでも十分に意味があります。

②時間をかけた復習（30 分ほど）

授業で一度扱った文章を自分で現代語訳してみましょう。何かに書いてもかまいませんし、頭の中で訳すだけでもかまいません。その際、文の構造や句形や重要語句に気を配ることが大切です。現代語訳を作ってみるなかで、授業中、理解できていなかったり聞き取れていなかったりした部分が見付かったら、担当に質問しましょう。

②漢文知識の確認（時間が取れるときに 5 分～10 分ほど）

授業時に配付するテキスト内には、最低限覚えるべき句形や漢字の読みや漢文語句があります。宿題を解く際だけではなく、少し時間が取れたときに何回か見直して覚えましょう。また、その際、疑問点が浮かんだら、担当に質問しましょう。

漢文は「できない」のではなく「読んだ量が少ない・勉強量が少ない」から現在点数が取れていない科目である可能性が高いのです。素読し、一定以上の量に触れれば確実にできるようになります！　ぜひ高 3 になる前に得意分野にしましょう。

（参考）受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- **東大**・・・・・・・・・理系でも二次試験まで必要
- **東工大**・・・・・・・二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、最終合否判定における共通テストの重要性が著しく低い
- **国立医学部**・・・二次試験に国語があるところは東大・京大など限られるが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、選択問題・記述問題という形式に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのように必要であるかを調べることが相当に重要です。

こうした入試制度に鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

高１・・・古文［春期講習からの通年講座、１年間完結］

高２・・・現代文［春～１２月］（文系、東大・京大志望の理系）

古文（高１で未履修の者）［春期からの通年講座、１年間（もしくは春～１２月）完結］

※高１・高２の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講（どこかで１回受講する）、それを踏まえた長文演習講座として新高３（高２）の1～2月に「漢文特別講座」開講

※高１・新高３（高２）の冬期講習に「小論文 Basic」開講

※新高３（高２）の１～２月に「古文特別講座」（高１・２で未履修の者向け速習講座）開講

高３・・・志望校別の対策［春期講習から直前講習で完結］

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、２次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大などの文系学部を受験する生徒向けの講座

※4月の入室テストで不合格の生徒は4～7月に「受験国語基礎」で基礎力強化

※夏期講習と冬期講習に「共通テスト国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる（関わりそうな）場合は、高2までに古文（漢文を使用する場合は、漢文も）の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。

物理科より

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□ノート

高校の先生は B5、大学の先生は A4 のノートで授業を用意するので、それぞれに合わせたものを用意するとうまくノートできます。**Gnoble** 物理の講師は、予め用意したものを丸写しするだけの授業をしないので、どちらのサイズでも構いません。まれにノートを用意せず、テキストに書き込むだけで済まそうとする人がいます。よく考えての上ならば構いませんが、こんなところで力を抜くのは避けましょう。

□筆記具

ボールペンや万年筆でノートする人がいます。素晴らしいことです、大学に入ったら是非そうしてください。ただし、大学入試においては黒色鉛筆かシャープペンシルしか使えないので、日頃からそちらに慣れておくのが無難でしょう。付け加えると、国立大学の入学試験では定規・コンパスが使えません。日頃からフリーハンドで図を描くようにしてください。

□フォルダ

ν（ニュー）レベルでは宿題用のプリントを配付します。毎回の授業後に配付しますので、フォルダ等を利用して整理することをお勧めします。

□電卓

αレベルを受講するとき必要です。あとで説明します。

②**Gnoble** の授業内で配付されるもの

□高 3 までの授業：通常授業では 2、3 回に一度、季節講習では初日に、一冊のテキストを渡します。また、νレベルのクラスでは授業毎に宿題用のプリント（B4）を 1 枚配付します。

□高 3 のEタームからのテスト演習：通常授業、季節講習ともに、準備運動の 1 問、本題の 2 問、お持ち帰り用の 1 問について、問題冊子、解答用紙と解答例を配ります。

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

Gnoble 物理には、νレベルとαレベルという二つのレベルがあります。

▽νレベル

νレベルは高 2 の春から始まり、冬前までにほとんど全ての物理法則を紹介します。題材は、入試に出題された問です。多くの問題を解いて解き方に慣れるのではなく、少ない問題で深く掘り下げていきます。授業中は頭をカラッポにしてどんどん吸収してください。新高 3 の冬以降は種々の応用例について紹介します。これまでに得た知識を再確認しつつ、手法、理論に磨きをかけてください。そして、高 3 夏以降はテスト形式で実践演習を行います。本番同様に限られた時間で確実にアウトプット出来るように訓練していきます。

▽αレベル

αレベルは高 2 の夏から始まり、高 3 春前までにほとんど全ての物理法則を紹介します。題材は、

歴史的な物理実験や科学者の辿った推論です。実際の実験から得られる本当の数値にこだわりますので電卓を持ってきてください。スマートフォンや電子辞書の電卓機能を使っても構いません。高3 春から夏にかけて、種々の応用例を紹介しています。入試にとらわれることなく、興味、好奇心のおもむくまま、それぞれの題材を味わってください。高3の9月以降はテスト形式で実践演習を行います。はじめの1、2回は入試問題に戸惑いますが、回を重ねる毎に手中にある法則の使いどころを体得していきます。

②日々の取り組み

▽復習

Gnoble における物理の授業時間は2時間ですが、途中に休みがある塾の2時間半から3時間分の内容を含んでいます。途中に休みがないので、授業が途中で冷めることなくヒートアップするからです。**受けた授業の内容を他人に説明できる**ようになったら安心して良いです。この復習には少なくとも2時間半から3時間を要するはずです。沢山疑問が出るはずなので、担当講師にどしどし質問してください。以上のことを、可能ならば授業を受けた当日の就寝前に、遅くとも次の授業を受ける前に行ってください。そして復習できたかどうかの試金石として、最後に確認問題を解いて下さい。この習慣を守っていただけると授業の内容が皆さんの血肉となり、大学入試の物理の問題ならば必ず解けるという状態に達することができます。

▽宿題

物理科では、一回の授業につき1問のペースで「確認問題」という宿題を出しています。解答は次の授業を受けるときに提出してください。添削してお返しします。νレベルの確認問題ならば20分、αレベルの確認問題ならば30分程度を要するでしょう。この確認問題を解くためには、授業の復習をしておかなければなりません。

③受講効果を上げるために

授業に遅刻しないようにしてください。一般的に言って、**10分遅刻すると1時間授業についてこられません**。部活の試合でどうしても遅刻するときや修学旅行でどうしても欠席するときは、曜日を振り替えて受講してください。物理の授業では大きな構造を一つ一つ積み上げていくので、途中に抜けているところがあるとその続きがあやふやになって身につかないからです。特別な事情があり、振替を出来ないときは、別に時間をとって補講をすることもあります。担当講師に相談してください。ところで、学校の定期試験の勉強のために **Gnoble** の授業を休みたいと申し出る人が稀にいます。定期試験は日頃に培った力を測るものです。定期試験中は通常の授業がない分余裕があるというのが望ましい状態です。学校の授業の復習も溜め込まず日々こなし、定期試験中も **Gnoble** の授業を休まないでください。

化学科・生物科より

１．ご用意いただくものと配付するもの

①予め用意して Gnoble の授業に持参すべきもの

□ノート

授業、宿題用のノートを用意ください。講義テキストを配りますが、授業内容を効果的に身につけるために、ご自身でノートをとることは重要です。

□筆記具

②Gnoble の化学・生物の教材

□テキスト冊子：通常授業では 2 回～4 回に一度、季節講習では初日に、二冊のテキストを授業内で配付します。二冊の構成は、ⓐ講義・解答集、ⓑ問題集です。毎回の授業に持参ください。

□プリント：問題演習、補助資料などのプリントを授業内で配付することがあります。

□テスト演習(化学は高 3 の E ターム(九月)～、生物は新高 3 の G ターム(三月)～)

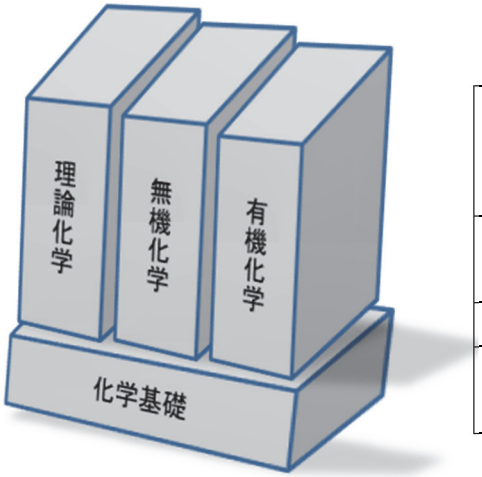
授業最初に、問題テキスト、解答用紙、講評などを配付します。授業内で、解答テキストを配付します。

２．授業の進み方と日々の取り組み

①授業の進み方

A) Gnoble 化学のカリキュラム

高校の化学は「化学基礎」という土台を踏まえたうえで、「化学」のなかで理論化学・無機化学・有機化学、それぞれの分野を詳しく学習していく構成となっています。



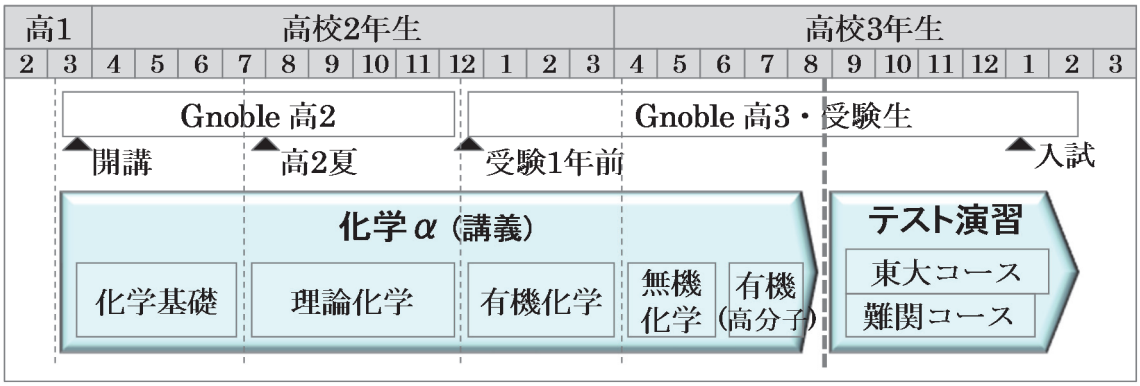
(表) 高等学校学習指導要領より

化学基礎	化学基礎 (1) 化学と人間生活 化学基礎 (2) 物質の構成 化学基礎 (3) 物質の変化
理論化学	化学 (1) 物質の状態と平衡 化学 (2) 物質の変化と平衡
無機化学	化学 (3) 無機物質の性質と利用
有機化学	化学 (4) 有機化合物の性質と利用 化学 (5) 高分子化合物の性質と利用

新高 2 の春期講習では、化学基礎(1)をテーマとしました。四月からの G タームにて化学基礎(2)、(3)の授業を進めていきます。理論化学は高 2 の夏期講習から、有機化学は新高 3 の冬期講習から、無機化学は高 3 の G タームから、それぞれ学習を始めます。

まず、化学基礎の土台をしっかりと固め、続いて理論化学を学習し、それらの知識を使いながら有機化学、無機化学を学ぶことで、本質的な理解をうながしていきます。

なお、カリキュラムの詳細は、パンフレットを参照ください。



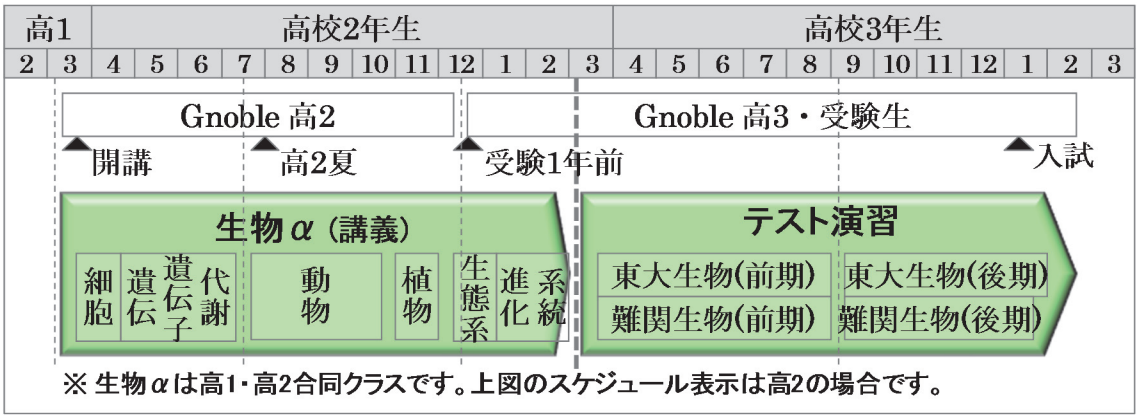
B）Gnoble 生物のカリキュラム

高校の生物は「生物基礎」と「生物」に分かれます。これらの違いは学習分野です。遺伝や生態系など両者で重複する内容もあり、より発展的な内容を「生物」で学びます。

- 生物基礎：遺伝子、体内環境の維持、多様性と生態系
- 生　　物：生命現象と物質、生殖と発生、環境応答、生態と環境、進化と系統

Gnoble 生物ではこれらを区別せずに一体化し、初学者（中学卒業）レベルの知識を前提として、高校生物の全分野を基本から一年間で講義していきます。

新高 1/新高 2 の春期講習では、生物を学ぶうえで基本となる“細胞”をテーマとしました。四月からのカリキュラム詳細は、パンフレットを参照ください。



講義形式の生物αは高1・高2の合同クラスです。たとえば医学部志望のように将来の進路を決めている場合、勉強時間に余裕のある高 1 のうちに生物をひと通り学習することで、高 2 で化学、高 3 で両科目の演習というように、計画的な入試対策が可能となります。また、文科系のかたが教養科目として受講する場合にも、高 1 での受講をお勧めしています。

C）Gnoble 化学・生物の講義

Gnoble 化学は新高 2 の春期講習から高 3 の夏期講習までの約 1 年半(66 回程度)において、**Gnoble** 生物は新高 2 の春期講習から新高 3 の F ターム(～二月)までの 1 年間(45 回程度)において、講義形式で授業をおこないます。

わたしたち **Gnoble** は、授業を通じて化学・生物の楽しさ、面白さを伝え、将来に活かせる教養を手にしてほしいと考えています。

実物にこだわります。**Gnoble** 化学はポイントとなる化学物質や興味深い化学反応を、できるだ

け実物で実際にお見せします。教室で扱えないものは映像や写真を示すなど、本物に触れる生きた化学をお見せします。**Gnoble** 生物でも、実際の生き物たちの映像や写真を数多く紹介します。

身近な事柄とのつながりを採りあげます。自然や生活と化学・生物との関わり、日常生活のなかで出くわす事柄やニュースで報道される話題などを題材に、化学・生物の基礎的な概念に導いていくようにします。

最新のテーマを紹介し、ときには発展的なレベルの解説も伝えていきます。高いレベルだからといって不安に思うことはありません。科学的な思考力を問うクイズを出しながら、楽しく授業を進めていきます。化学・生物を知識の暗記科目という捉え方ではなく、ご自身の力で考える科目として理解していきましょう。

授業のなかで入試問題を採りあげた演習の時間を設けています。また、学習度合いを確認するテストを定期的に実施し、クラス分けをおこないます。

D）**Gnoble** 化学・生物のテスト演習

Gnoble 化学は高 3 の E ターム(九月～)から冬期講習・直前講習までの約半年間において、**Gnoble** 生物は新高 3 の春期講習から約 1 年間において、テスト演習形式で授業をおこないます。

難関大学の入試問題を採りあげ、皆さん一人ひとりの答案を確認しながら、入試を乗り越える力、実戦力を養っていきます。

入試までの限られた時間の中で、より高い効果が得られるように、志望先に応じた二種類のクラスを設置します。東大コースは東京大、京都大、慶應大(医)など、難関コースは国公立大・私立大の医学部をはじめ難関大学を志望先とするかたを対象とします。原則、希望に応じたクラス分けをおこなう予定です。授業内容など詳細は改めてお知らせします。

②日々の取り組み

A）復習

復習が重要です。ご自身が受けた授業の内容を、友人や後輩など他のかたへ説明できるようになれば、理解したといえるでしょう。一度で理解できなかったら、理解できるまで考えてみて、そして担当講師に質問ください。理解したかどうかのチェックには、宿題を活用しましょう。これらの取り組みかたを守れば、必ず科学的に考える力が身につき、受験時には入試を乗り越える力を手に入れられます。

B）宿題

Gnoble 化学・生物の授業では、毎回数問の宿題を出しています。ⓑ問題集テキストの各問題を、“必須／無印／＋α”に区分しています。必須と無印の問題を宿題として取り組むのが、効果的な学習方法です。所要時間は 30 分～1 時間程度だと思います。ただ、いろいろなご都合により宿題に対応できないこともあるでしょう。そのような際は“必須”の 1 問だけは取り組むようにしましょう。

③受講効果を上げるために

他科目と同じように、「休まない・遅れない」を心がけましょう。